

# FLORA KANAGAWA

Jan. 5. 1996 No. 41

神奈川県植物誌調査会ニュース第41号

〒250 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 内線420・振替 00230-5-10195



ユウシュンラン。これまで丹沢では採集されていましたが、箱根では記録がありませんでした。箱根町大平台にて(宮坂七三十氏撮影)。

城川四郎: ミヤマガマズミ基本種は丹沢、箱根に分布しない!	436
高橋秀男: 丹沢のサカネラン	437
山田文雄: アレチイネガヤの発見	437
勝山輝男: 絶滅したと思ったら・・・再発見されたラン科植物 その2	439
根本 平: 藤沢市大庭遊水地のヨモギ属	441
田中京子: 横浜市港南区に追加される植物	445
事務局: 平成7年度野外研究会の記録	446

ミヤマガマズミ基本種は丹沢、箱根に分布しない！

(城川四郎)

ミヤマガマズミ *Viburnum wrightii* Miq. はふつう葉の表面に毛がないか、または絹毛を散生する。その基本種に対し葉の表面に分岐毛をやや密に生ずるオオミヤマガマズミ *var. stipellatum* Nakai という変種がある。単に毛の有無だけの違いではなく、オオミヤマガマズミの方が基本種に比べて葉がやや大きく、多少葉形も違う。丹沢や箱根にオオミヤマガマズミが分布することは承知していたが、基本種のミヤマガマズミの確認をしないまま両方分布しているものと思込んでいた。しかし、近年、気になって丹沢を歩くとき葉に触るよう心がけたところ、すべてピロッド感のあるものばかりであった。オオミヤマガマズミの葉の表面は開出する分岐毛がかなり密に生えているので、触るとピロッド感がある。その後、箱根を歩くときも注意しはじめたが、やはり基本種のミヤマガマズミに出会うことができなかった。富士山3合目あたりを歩くときにも注意してみたが、やはりオオミヤマガマズミばかりである。今年は大分の久住山を歩く機会があったが、ここでも観察したのはオオミヤマガマズミだけであった。県立博物館の標本を調べてみると、丹沢、箱根、富士周辺はすべてオオミヤマガマズミだけであり、基本種のミヤマガマズミと判定できる標本は、北海道、秋田、新潟、石川、群馬、滋賀の各県を産地とするものの外に、神奈川県植物誌1988の証拠標本として採集された横浜市上郷町産(武井尚氏採集)と相模湖町嵐山、陣馬山産(故森茂弥氏採集)があった。日本の野生植物(平凡社)には軽井沢で撮影したミヤマガマズミとオオミヤマガマズミの写真があるから、ここでは基本種と変種が同所的に分布しているらしい。しかし、標本を通覧した印象として

は、基本種ミヤマガマズミは日本海側要素の植物であり、変種オオミヤマガマズミは太平洋側要素の植物であるように思われる。ただし、分布の境界を線で引けるような単純なものではない。県立博物館の標本の中でも、日本海側要素が強い黒姫山で採集されたオオミヤマガマズミがあり、太平洋側要素の強い神奈川に少数ながらミヤマガマズミがあるなど、複雑な要素を内包しているらしい。この点について、手もとの地方植物誌のなかで特に山口県植物誌(岡)が目される。「基本種ミヤマガマズミは普通に産するのに対し、オオミヤマガマズミはブナ林と強く適合しているものと思われ、千米以上で見られるにすぎない」と記述している。わたしはミヤマガマズミをブナ帯の植物と認識していた。しかし、山口県ではミヤマガマズミとオオミヤマガマズミの分布域が異なり、ミヤマガマズミはブナ帯より低い山域に分布しているようである。相模湖町嵐山や陣馬山のミヤマガマズミの標本をいぶかしく思っていたが、山口県で見られるような分布と同じ型と考えれば納得がいく。日本海側要素の希薄な神奈川ではミヤマガマズミの分布も希少で目立たなかったのであろう。少なくとも関東以西の太平洋側のブナ帯に分布するのはオオミヤマガマズミだけではないかと推論する。今後、機会あるごとにその検証を続けたい。

オオミヤマガマズミの葉の表面の毛について、日本の野生植物(平凡社)には「単純、またはときに分岐する」、原色日本植物図鑑(保育社)には「星状毛」、山口県植物誌には「短伏毛」、日本樹木総検索誌(杉本)には「長い伏毛」と記述されているが、「開出する2~3分岐毛に単純毛が混じる」のが実態である。なお、原色日本植物図鑑ではオオミヤマガマズミはミヤマガマズミとガマズミとの雑種であろうと記しているが、それは全く考えられぬことのように思う。

## 丹沢のサカネラン

(高橋秀男)

前号(40)の表紙を飾ったサカネラン *Neottia nidus-avis* (L.) Rich. var. *mandshurica* Komar. の写真は、東京大学総合資料館の大場研が6月4日に西丹沢の権現山に遠足に出かけたとき、メンバーの一員として加わり撮影したものである。山北町の西丹沢自然教室から西沢を経て、権現山へ向かう途中、山頂に近い標高1000m付近のブナ林中に1本生育していた。

私はかつて、奥山春季監修の『植物採集ニュース』第45号(1969年9月)に「アオキランとサカネランの新産地」の表題で、1969年6月に南アルプス北岳の登山口の広河原で採集した記録を報告したことがある。私にとってサカネランは、懐かしい思い出のランでもある。

丹沢におけるサカネランは、丹沢山塊の植物相の全貌を明らかにした調査報告書(林弥栄ほか、1961)には記載されていないが、1950年代には、風巻(城川四郎、1959.6.12, KPM 96635)、丹沢山(奥山春季、1951.7.23, TNS)、清川村札掛(吉川代之助、1958.5.3, TNS 137354, HCM 49585)などの採集地が知られている。これらの記録は『神奈川県植物誌1988』の分布図に反映されており、神奈川県レッドデータ生物調査報告書(1995)では絶滅危惧種として報告されている。県内では、ほかに箱根の浅間山(沢田武太郎、1929.5.17, KPM 81432)と登戸(県植目1933)で採集されている。

サカネランは高さ20~40cmの地生ランで、莖、花柄、子房などに縮れた毛を密生する。丹沢産もすべて有毛であった。花は莖の上部に密集し、淡黄褐色の地味なもので、6月頃に咲く。極めて稀なランであるから、根こそぎ抜き取ることは出来ないが、地下部を見ると、沢山の径1~1.5mmの肥厚根が集まり開出または斜上する。逆根蘭(サ

カネラン)の名はこの根の生え方に由来する。主として中部以北の本州、まれに九州、北海道、サハリン、南千島、中国東北部、アムール、ウスリーに分布する。一方、全株平滑、無毛のものがあり、これをエゾサカネラン var. *nidus-avis* と呼ぶ。北海道、サハリン、シベリア、ヨーロッパに分布し、一部の地域では混生していると言う。

属名の *Neottia* ネオッチアはギリシャ語の鳥の巣、種小名の *nidus-avis* ニドス・アウイスもラテン語で鳥の巣の意味、根の集まりが鳥の巣に似ているから名付けられた。

## アレイネガヤの発見

(山田文雄)

1995年9月27日(水)、横浜市中区新山下町3丁目の貯木場付近の路傍において、見慣れぬイネ科の植物を発見した。アズマネザサのように節に白い葉鞘が残っているのが印象的だった。近くには計6株が生えていた。付近は宅地からの排水が流れ、水たまりができやすいところで、タカサプロウなどが生えていた。ちょうどこの秋、県博のかながわ県民アカデミーでイネ科の講義を受けていたこともあり、興味深く思い採集して調べたところ、長田武正著『増補日本イネ科植物図譜』(平凡社)P. 100のアレイネガヤ *Oryzopsis miliacea* (L.) Benth et Hook. ex Asch. et Schweinf. に似ていた。早速、県博の木場英久先生に詳しく調べていただいたところ、まさしくそうであるとお答えをいただいた。神植誌1988には記録がないので神奈川県新産である。

今回採集したアレイネガヤの概要は次のとおりである。多年草。稈は根元から多数枝分かれして斜上し、秋には倒伏して節から根を出す。高さ70~80cmになり、丈夫で固く、緑色で光沢があり、太さは径1.5~2.5mm。稈の上部にはやや下向きの微毛がある。葉鞘に毛は無い。葉は長さ10~



アレチイネガヤ. a: 全体, b: 外穎の先端, c: 花序の一部, d: 小穂.

17cm, 巾2~5mmであった。葉の形は線形で先はしだいに針のように細くなっていき、表面、裏面ともに無毛である。色は稗より少し淡い緑である。葉舌は高さ1~2.5mmぐらいである。葉耳はあまり発達しない。円錐花序は6個内外の節をもち各節から4~5本の枝を輪生し、24cmぐらいで、枝は微細な上向きの毛があり、ざらつく。小穂は有柄、1小花よりなっていて、第一包穎は長さ3mm, 3脈, 第二包穎は長さ2.6mm, 3脈である。外穎には長さ4.3mmぐらいの芒が先端より出ている。開花は円錐花序の先端、または枝の先端より始まり、したがって先のほうでは結実し、元のほうでは開花している様子が同じ花序で同時に見られる。さらに、春から夏にかけて伸びた稗の節から、秋に芽を出し花穂をつけている。

絶滅したと思ったら・・・

## 再発見されたラン科植物 その2

(勝山輝男)

昨年 FLORA KANAGAWA No.38 でフガクスズムシとキソエビネの再発見について報告しましたが、今年もイチヨウラン、コフタバラン、アリドオシラン、ヒナチドリ、ミヤマモジズリの5種のラン科の消息不明種が再発見されました。この5種は神奈川県植物誌1988の調査で標本が採集できず、その後も発見されなかったので、神奈川県レッドデータ生物報告書でも絶滅(Ex)としてしまいました。それぞれ写真をつけ、速報したいと思います。

イチヨウラン *Dactylostalix ringens* Rchb.f.

6月の野外研究会のとき、二宮町の山本絢子さんが「西丹沢の×××にありますよ、写真も撮ってあります」と教えてくださいました。写真は1991年5月15日に撮影されたものです。箱根の神中で沢田武太郎が1930年

代に採集した古い標本(KPM-81404, KPM-81405)が県博に残されていますが、丹沢の記録はありませんでした。本来は亜高山帯の針葉樹林のコケのある林床などに生える種類なので、丹沢や箱根からはもう期待できないものと思っていました。

## コフタバラン

*Listera cordata* R.Br. var. *japonica* H.Hara

県博に箱根神山で採集された古い標本(KPM-11573 箱根神山 1963.06.27 大場達之; KPM-81426 箱根大涌谷 1936.05.25 沢田武太郎)が残されていますが、神奈川県植物誌1988では標本が採集されていませんでした。二宮町の山本絢子さんから、次のアリドオシランとともに、箱根に現存することを教えていただきました。そこで1995年7月9日に山本さんに案内していただき、勝山、木場、金井、梅木で見に行きました。アリドオシランとほぼ同じ場所で数本のコ



イチヨウラン

フタバランを見つけることができました。高さ2~3cmのきわめて小型のランですから、よく目を凝らしていないと見逃してしまいます。すでに子房が膨らみ、果実が実りかけていました。

アリドオシラン *Myrmechis japonica* Rolfe

本種も県博に箱根神山で採集された古い標本(KPM-91429 箱根神山 1937.07.21 沢田武

太郎)が残されていますが、神奈川県植物誌1988の調査では発見されませんでした。文献には箱根だけでなく、丹沢の記録もあります。コフタバランと同様、1995年7月9日に箱根で再確認しました。個体数は多く、林床の落葉の間に白米をばらまいたように点々と白色の花がみつかりました。花の盛りにはやや早く、完全に開いている花はまだありませんでした。



コフタバラン



ミヤマモジズリ



アリドオシラン



ヒナチドリ

ミヤマモジズリ *Neottianthe cucullata* Schltr.

1995年9月12日に山本絢子さんと金井和子さんが表丹沢で発見されました。丹沢と箱根に記録がありましたが、神奈川県植物誌1988の調査では見つかりませんでした。富士山周辺には多く見られるので、丹沢での再発見が期待されていた種類です。

ヒナチドリ *Poneorchis chidori* Ohwi

樹幹に着生するラン科植物。林弥栄らの丹沢山塊植物調査報告(1961)に塔ヶ岳、ユーシンの記録があり、この標本は科博に残されていることが確認されています。1995年7月30日に秋山、城川、田中、勝山の4名で丹沢大山自然環境調査のために世附川方面を調査しました。その際、イタヤカエデの大木に着生するピンク色の花が目に入りました。木に近づいて双眼鏡で観察し

たところ、本種であることが確認できました。100株近く着生していましたが、木が大きくとっても採集できそうにありません。しばし、眺めてあきらめました。しかし、その木からそれほど離れていないところに、もう1本ヒナチドリの着生している木が見つかり、こちらは5mほどよじ登ることができ、棒を使って3~4株落すことに成功しました。丹沢で2度目の採集記録です。感激の1日でした。

### 藤沢市大庭遊水地のヨモギ属

(根本 平)

最近多目的公園として造成された大庭遊水地の土手には、北海道以外の日本各地で見られるヨモギ *Artemisia princeps* Pamp.ばかりでなく、山地や丘陵に多いオトコヨモギ *A. japonica* Thunb., 河原や海岸砂丘に多いカ

表1. ヒメヨモギ(A)と、ヒメヨモギに近い個体群(B).

	総包の幅	総包の長さ	下方の葉	上方の葉
A	1mm	2.5-3mm	長卵形で、羽状深裂する。 裂片は幅3mm以下と狭い。	長さ約1-3cmの線形の葉を 密につける。
B	1.5-2 1.5-2.5 2-2.5	2.5-3.5 2.5-3.5 3-3.5	広卵形で羽状深裂する。 裂片は幅5mm内外と広い。	葉数が比較的疎ら。葉の大小 長短が目立ち、幅6mm、長さ 7cmを越すものも混じる。



イワヨモギ 3~3.5 - 3~3.5



オトコヨモギ 1.5 - 2



カワラヨモギ 1.5 - 2



タカヨモギ 2~2.5 - 4~5



ヒメヨモギ 1 - 2~2.5



ヨモギ 1.5 - 3~3.5 (つぼみ)

大庭遊水地のヨモギ属6種. 数字は、頭花の幅-長さ (mm).





ヒメヨモギに近い個体. 数字は、頭花の幅-長さ (mm).

表2. ヨモギ属6種の花期

種名	長田 <sup>a</sup>	北村1 <sup>b</sup>	牧野 <sup>c</sup>	寺崎 <sup>d</sup>	北村2 <sup>e</sup>	藤沢現地
イワヨモギ	—	9~10月	—	9~10月	—	8月
オトコヨモギ	8~10月	8~9月	秋	8~11月	8~9月	7~8月
カワラヨモギ	8~10月	—	夏~秋	9~10月	9~10月	7月
タカヨモギ	夏	—	—	—	—	8月
ヒメヨモギ	8~10月	8~10月	秋	8~11月	—	7~8月
ヒメヨモギに近い個体群	—	—	—	—	—	7~8月
ヨモギ	9~10月	8~10月	夏~秋	8~10月	9~10月	9月以降

出典 a: 長田武正, 日本帰化植物図鑑(北隆館), 検索入門・野草図鑑4(保育社); b: 北村四郎, 原色日本植物図鑑上(保育社); c: 牧野富太郎, 牧野新日本植物図鑑(北隆館); d: 寺崎留吉, 寺崎日本植物図譜(平凡社); e: 北村四郎, 週刊朝日百科・世界の植物3(朝日新聞社).

ワラヨモギ *A. capillaris* Thunb., 丹沢山麓の清川村でしか確認されていなかったイワヨモギ *A. iwayomogi* Kitam., 小田原以東三浦半島までの湘南一帯では確認されていなかったヒメヨモギ *A. feddei* Lev. et Van., 県内では、まだどこでも確認されていなかったタカヨモギ *A. selengensis* Turcz. などが、かなり多く群生しております。

公園造成以前の休耕田の時期には、まれにオトコヨモギがはえるほか、ほとんどヨモギであったと記憶しております。その遊水地の土手に、ヨモギ属が大量群生した原因としては、次のようなことが考えられます。土手の造成の際、土留め用植物(オニウシノケグサ、ヒロハノウシノケグサなど)の播種に、ヨモギ属の種子が混入していて、一緒にはえたということです。そして、この土手の環境がイネ科のウシノケグサ属よりもキク科のヨモギ属向きであったため、年毎に繁茂して主客転倒の現状にいたったと考えられます。この客人は、主人以上にしっかりと土手に地下茎を伸ばし、土留めの役目を立派に果たしております。今後の高速道路などの土留め役には、殺風景なイネ科よりこちらを推薦したいところです。それにしても、数種の同属植物が共存共栄するこの現象は、きわめて珍しいことだと

思います。

また、上記の6種以外に、ヒメヨモギに近い個体群が観察されますが、確実なところはまだ分かりません(表1)。今までのヒメヨモギの記載によると、表1のBはヒメヨモギの1品種かもしれませんが。またヒメヨモギと別の種類かもしれません。

今日まで都道府県別に植物誌が多数出版されておりますが、その中でも白眉といわれるのが、本県の『神奈川県植物誌1988』です。これによりますと、関東産のヒメヨモギは、西日本のそれと若干異なり、ヨモギとの交雑個体群とも考えられるとあります。

しかし、藤沢市の現地のヒメヨモギは7月に咲き、ヨモギは9月以降に咲くので、ここに限っては両者の交雑の可能性は薄いと思われます(表2参照)。総包の形や大きさ、葉の状態などの外観では、タカヨモギとの類似点が多く、花期の点からもタカヨモギの方が、ヒメヨモギとの交雑の可能性が高いと思われます。タカヨモギに似て、緑色の光沢のある硬い円い茎をした個体も観察されました。

Bには、シベリア原産で、サラダやオムレツなどの香辛料にするためヨーロッパで栽培され、フランスのエスカルゴ料理にも

使われるというタラゴン *Artemisia drucunculus* L. のような個体も見られましたが、これは普通開花せず、開花しても実らず、挿し芽でふやすそうですから、他人の空似ということかもしれません。

ヨモギ属の花期について、一般的な図鑑で調べましたら表2のような差異がありました表2以外の著書では、杉本順一著『日本草本植物総検索誌1』(6月社)や『週刊朝日百科・植物の世界』などには、花期の記述は皆無。山と溪谷社の『日本の野草』には、オトコヨモギ、カワラヨモギ、ヨモギともに9~10月。『神奈川県植物誌1988』にはオトコヨモギの秋咲きのみ。今年の異常気象に、かなり影響されているかもしれませんが、藤沢市の現地のそれとは、あまりに隔たりがあります。来年はこの点も含めて観察を深めていきたいと思います。

ヒメヨモギに近い個体群につきましては、博物館にお願いして、新鋭機器によって観察し、同定していきたいと考えております。

## 横浜市港南区に追加される植物

(田中京子)

野庭町の通称上野庭地区と下永谷を中心に調査したところ、思いがけず多くの新産種に出会うことができた。山林の宅地化が進むなか、僅かに緑地が残っている地域で、まだ貴重種が発見される可能性があるが、これまでの記録を報告する。

### ・ハイイロヨモギ 下永谷(1995. 8. 8)

永谷川べりの土手に頭花の大きい見慣れないヨモギ属の小群落があった。高橋秀男先生に鑑定をお願いしたところ、帰化植物のハイイロヨモギとのこと。強い臭いがあり、下方の葉は葉柄が長く2~3回羽状に裂ける。この土手ではハイイロヨモギが優勢で、高さ1mぐらいの大きな株や50cmぐらいの細長い株が、ヨモギやブタクサなどと混ざって群生している。長田著『原色日本帰

化植物図鑑』によると「長野県小諸町の千曲川畔の川らで1952年発見され、今のところ日本で唯一の産地である」と記されている。どうして下永谷に侵入してきたかは不明である。

### ・ナツフジ 下永谷(1995. 8. 25)、野庭町(1995. 7. 12)、芹ヶ谷(1995. 8. 16)

以前、上永谷の山林で採集したナツフジを報告したが(横浜植物会年報24号P. 37-41)、新たに3ヶ所の林縁に自生しているのが見つかった。東海道以西に分布するといわれ、神奈川県での自生を疑問視するむきもあるようだが、下永谷在住の天津任氏によると、付近の山林では普通にみられたとのこと。今回の発見場所からみても、まず自生していたとみて間違いのないと思われる。

### ・ヤマエンゴサク 下永谷(1995. 4. 17)

神奈川県植物誌1988によると、県内における分布型はコナラ-ヤマブキソウ型で、県北部で記録されている。今回、分布地域から大分離れた港南区で採集した。

### ・イチリンソウ 下永谷(1995. 4. 30)

ヤマエンゴサクがあった同じ場所に群生している。道路拡張工事のため山林が削られている付近の現状をみると、以前にはもっと多数生育していたと思われる。

### ・ヒトツバハギ 芹ヶ谷(1995. 6. 6)

戸塚区との境に、雌株と雄株が合わせて5本あり、花や実を観察するには好適地。この場所は、もと山林だったところが住宅地になったところで、その斜面に僅かに残っている。

### ・キツリフネ 野庭町(1995. 7. 23)

竹林下に群生している。横浜市では稀産。

### ・タチヤナギ 下永谷(1995. 4. 30)

永谷川べりの湿地で1本確認した。

### ・ヒメドコロ 野庭町(1995. 9. 4)

低地で生育しているのは稀だとのことである。

### ・オヘビイチゴ 下永谷(1995. 4. 30)

### ・ツクバキンモンソウ 下永谷(1995. 5. 8)

- ・カワラヨモギ 下永谷(1995. 8. 8)
- ・ササバギンラン 下永谷(1995. 5. 8)
- ・ホオノキ 芹ヶ谷(1995. 8. 16)
- ・タニソバ 野庭町(1995. 7. 23)
- ・コバノガマズミ 野庭町(1995. 7. 12)
- ・セイヨウヤブイチゴ 下永谷(1994. 6. 15)
- ・ユウゲショウ 野庭町(1995. 5. 19)
- ・ウスベニチチコグサ 下永谷(1995. 5. 8)
- ・コゴメバオトギリ 日限山(1995. 7. 23)  
稲垣ユキ子氏の案内で採集したもの。
- ・コ克蘭 野庭町(1995. 7. 12)  
あまり人が入らないスギの植林地に点在している。
- ・カワラナデシコ 野庭町(1995. 7. 23)  
水田のあぜ道の土手に2株あった。めっきり個体数が減ってしまった花の一つ。
- ・コハナヤスリ 野庭町(1995. 7. 12)  
栄養葉は中央部よりやや下が広い。ススキやナンバンギセル、ヒメハギなどが見られる草地に生育している。神奈川県では稀産種。
- ・アワブキ 野庭町(1995. 7. 23)

## 平成7年度野外研究会の記録

### (事務局)

6月25日(日)と10月10日(祝・火)に実施された2回の野外研究会について報告する。

6月25日に実施された第1回の野外研究会は、高橋秀男、勝山輝男、木場英久、田中徳久の案内による、小田原市入生田から、石垣山を越え、早川へと抜けるコースで、調査メッシュは、小田原4にあたる。10月10日に実施された第2回の野外研究会は、城川四郎、秋山 守の案内による、清川村土山峠から、経ヶ岳を越え、愛川町半原へと抜けるコースで、調査メッシュは、清川3と愛川町にあたる。

当日観察された植物と参加者は以下のとおりである。植物の記録は、第1回は長谷川義人、第2回は根本 平、高坂雅子、田

中京子の各氏による。なお、メッシュ新産のものなど、一部の種では標本が採集されているが、大部分はメモによる記録である。また、疑問符や()書きのメモなどは割愛させて頂いたので、活用には留意されたい。記録を寄せられた各氏に感謝の意を表する。

6月25日(日)

○イワヒバ科：イヌカタヒバ、クラマゴケ、○トクサ科：スギナ、○ゼンマイ科：ゼンマイ、○ウラジロ科：ウラジロ、○ワラビ科：イワガネゼンマイ、イヌシダ、イワヒメワラビ、フモトシダ、タチシノブ、オオバノイノモトソウ、イノモトソウ、ホラシノブ、○キジノオシダ科：キジノオシダ、○オシダ科：ホソバカナワラビ、ハカタシダ、オニカナワラビ、リョウメンシダ、イヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ヒロハイヌワラビ、シケチシダ、キヨスミヒメワラビ、ホシダ、ヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、ベニシダ、クマワラビ、オクマワラビ、オオイタチシダ、ミゾシダ、イヌガンソク、ゲジゲジシダ、アイアスカイノデ、イノデ、ジュウモンジシダ、ハシゴシダ、ハリガネワラビ、ヤワラシダ、ヒメワラビ、○チャセンシダ科：トラノオシダ、○マキ科：ナギ、○マツ科：モミ、○ヒノキ科：ヒノキ、○イネ科：タチカモジグサ、カモジグサ、ヤマカモジグサ、ヒメコバンソウ、キツネガヤ、ホガエリガヤ、カモガヤ、ホソムギ、ネズミホソムギ、ススキ、チヂミザサ、シマスズメノヒエ、スズメノカタビラ、カニツリグサ、○タケ科：マダケ、ハコネダケ、○カヤツリグサ科：ナキリスゲ、ホンモンジスゲ、○ツユクサ科：ツユクサ、ヤブミョウガ、トキワツユクサ、○ビャクブ科：ナベワリ、○ユリ科：ウバユリ、ホウチャクソウ、ノカンゾウ、ヤマユリ、ヤブラン、オオバジャノヒゲ、ナルコユリ、オオナルコユリ、キチジョウ

ソウ, サルトリイバラ, シオデ, ホトトギス, ○ヤマノイモ科: オニドコロ, ○アヤメ科: シャガ, ○ショウガ科: ハナミョウガ, ○ラン科: コ克蘭, ○ドクダミ科: ドクダミ, ○センリョウ科: フタリシズカ, ○カバノキ科: オオバヤシャブシ, ○ブナ科: スダジイ, ○ニレ科: ムクノキ, エノキ, ケヤキ, ○アサ科: カナムグラ, ○クワ科: ヒメコウゾ, クワクサ, イヌビワ, イタビカズラ, ヤマグワ, ○イラクサ科: ハマヤブマオ, カタバヤブマオ, クサコアカソ, クサマオ, ナンバンカラムシ, ナガバヤブマオ, ムカゴイラクサ, ミズ, ヤマミズ, ○ウマノスズクサ科: オオバウマノスズクサ, オトメアオイ, ○タデ科: ミズヒキ, ママコノシリヌグイ, ヤブタデ, ツルドクダミ, イタドリ, ○ヒユ科: ヒナタイノコツチ, ○ナデシコ科: オランダミミナグサ, ツメクサ, ウシハコベ, ○フサザクラ科: フサザクラ, ○キンポウゲ科: イヌシヨウマ, サラシナシヨウマ, ボタンヅル, ハンシヨウヅル, ヤマキツネノボタン, ○アケビ科: アケビ, ミツバアケビ, ○ツツラフジ科: アオツツラフジ, ○モクレン科: シキミ, ○クスノキ科: ヤブニッケイ, ニッケイ, アブラチャン, クロモジ, タブノキ, ○ケシ科: タケニグサ, ○アブラナ科: ヤマハタザオ, ○ベンケイソウ科: コモチマンネングサ, ○ユキノシタ科: アカシヨウマ, クサアジサイ, マルバウツギ, タマアジサイ, ヤマアジサイ, ユキノシタ, ○バラ科: キンミズヒキ, ヤブヘビイチゴ, ビワ, オオシマザクラ, アズマイバラ, フユイチゴ, クサイチゴ, モミジイチゴ, カジイチゴ, ○マメ科: ネムノキ, ヤブマメ, ホドイモ, ヌスビトハギ, ノササゲ, キハギ, ネコハギ, クズ, フジ, ○カタバミ科: カントウミヤマカタバミ, カタバミ, ハナカタバミ, ○ミカン科: マツカゼソウ, コクサギ, ○ニガキ科: シンジュ, ○トウダイグサ科: ナツト

ウダイ, アカメガシワ, シラキ, ヒトツバハギ, ○ウルシ科: ヌルデ, ヤマハゼ, ○ニシキギ科: マユミ, ○ミツバウツギ科: ミツバウツギ, ○クロウメモドキ科: クマヤナギ, ○ブドウ科: キレハノブドウ, ヤブカラシ, ツタ, サンカクヅル, エビヅル, ○シナノキ科: カラスノゴマ, ○ツバキ科: チャノキ, ヒサカキ, ヒメシャラ, ○スミレ科: ナガバノスミレサイシン, タチツボスミレ, ○シュウカイドウ科: シュウカイドウ, ○キブシ科: キブシ, ○ジンチョウゲ科: オニシバリ, ○ウリノキ科: ウリノキ, ○アカバナ科: メマツヨイグサ, ユウゲシヨウ, ○ウコギ科: オカウコギ, ヤマウコギ, ウド, タラノキ, キツタ, ○セリ科: イワニンジン, セントウソウ, ミツバ, ミヤマチドメ, ウマノミツバ, オヤブジラミ, ○ミズキ科: クマノミズキ, ハナイカダ, ○ヤブコウジ科: マンリョウ, ○サクラソウ科: ミヤマタゴボウ, オカトラノオ, コナスビ, ○エゴノキ科: エゴノキ, ○モクセイ科: ネズミモチ, オオバイボタ, ○キョウチクトウ科: テイカカズラ, ○ガガイモ科: キジョラン, オオカモメヅル, ○クマツヅラ科: クサギ, ○シソ科: トウバナ, イヌトウバナ, セキヤノアキチョウジ, ○ナス科: ヒヨドリジョウゴ, イヌホオズキ, ハダカホオズキ, ○ゴマノハグサ科: タチイヌノフグリ, オオイヌノフグリ, ○キツネノマゴ科: キツネノマゴ, ○ハエドクソウ科: ハエドクソウ, ○オオバコ科: オオバコ, ○アカネ科: ヤマムグラ, ハマサオトメカズラ, アカネ, ○スイカズラ科: スイカズラ, ニワトコ, ガマズミ, ニシキウツギ, ○ウリ科: アマチャヅル, ○キキョウ科: ヤマホタルブクロ, ツルニンジン, ○キク科: ヨモギ, ノコンギク, シロヨメナ, コセンダングサ, モミジガサ, タイアザミ, オオアレチノギク, ヒメジョオン, ハルジオン, ヒヨドリバナ, ツワブキ, ハキダメ

ギク、ニガナ、ユウガギク、アキノノゲシ、ケムラサキニガナ、カシワバハグマ、フキ、コウゾリナ、シュウブンソウ、ヤブレガサ

当日の参加者：秋山 守、石渡 宏、稲垣ユキ子、岩田 實、梅木俊子、大前悦宏、勝山輝男、河又 猛、菊地真知子、国沢則子、木場英久、佐々木あや子、高坂雅子、高橋多枝子、高橋秀男、田中京子、田中徳久、長岡 恂、中尾眞弓、根本 平、萩原恭一、長谷川義人、山内好孝、山下 勇、山下敏夫、山田友久、山田文雄、山本絢子

10月10日(祝・火)

○イワヒバ科：クラマゴケ、イワヒバ、  
○トクサ科：スギナ、○ハナワラビ科：オオハナワラビ、○ゼンマイ科：ゼンマイ、  
○カニクサ科：カニクサ、○ワラビ科：イワガネソウ、イヌシダ、タチシノブ、ワラビ、オオバノイノモトソウ、イノモトソウ、○シノブ科：シノブ、○オシダ科：イヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ホシダ、ヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、ベニシダ、トウゴクシダ、オオベニシダ、クマワラビ、オクマワラビ、オオイタチシダ、ヤマイタチシダ、ミゾシダ、シケシダ、ナチシケシダ、フモトシケシダ、ハクモウイノデ、ゲジゲジシダ、アイアスカイノデ、イノデ、イノデモドキ、アマギイノデ、ハリガネワラビ、ヒメワラビ、ミドリヒメワラビ、○チャセンシダ科：コバノヒノキシダ、イワトラノオ、○ウラボシ科：ヒメノキシノブ、○イチイ科：カヤ、○イヌガヤ科：イヌガヤ、○マツ科：モミ、アカマツ、ツガ、○スギ科：スギ、○ヒノキ科：ヒノキ、サワラ、アスナロ、○イネ科：カモジグサ、ヌカボ、コブナグサ、トダシバ、ヤマカモジグサ、ノガリヤス、メヒシバ、アキメヒシバ、アブラススキ、オヒシバ、カゼクサ、ナルコビエ、ウラハグサ、ササガヤ、ヒメアシボソ、アシボソ、ススキ、チ

ヂミザサ、コチヂミザサ、ヌカキビ、オオクサキビ、スズメノヒエ、チカラシバ、ヨシ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、セイバンモロコシ、オオアブラススキ、ハネガヤ、○タケ科：アズマネザサ、ヤダケ、ミヤマクマザサ、ミヤコザサ、スズタケ、○カヤツリグサ科：シラスゲ、ケスゲ、ヒカゲスゲ、ナキリスゲ、カンスゲ、ホンモンジスゲ、○サトイモ科：セキショウ、ミミガタテンナンショウ、カントウマムシグサ、ウラシマソウ、○ツユクサ科：ツユクサ、ムラサキツユクサ、○イグサ科：タチコウガイゼキショウ、○ユリ科：ホウチャクソウ、チゴユリ、オオバギボウシ、ヤマユリ、ヤブラン、ジャノヒゲ、ナガバジャノヒゲ、オオバジャノヒゲ、ナルコユリ、アマドコロ、キチジョウソウ、ツルボ、サルトリイバラ、シオデ、ヤマガシユウ、ヤマホトトギス、○ヒガンバナ科：ヒガンバナ、○ヤマノイモ科：ヤマノイモ、キクバドコロ、ヒメドコロ、オニドコロ、○アヤメ科：シャガ、○ショウガ科：ミョウガ、○ラン科：サイハイラン、ツチアケビ、○ドクダミ科：ドクダミ、○センリョウ科：ヒトリシズカ、フタリシズカ、○ヤナギ科：イヌコリヤナギ、○クルミ科：オニグルミ、○カバノキ科：オオバヤシャブシ、サワシバ、クマシデ、アカシデ、イヌシデ、ツノハシバミ、○ブナ科：クリ、シナグリ、スダジイ、アカガシ、アラカシ、シラカシ、クヌギ、コナラ、○ニレ科：エノキ、ケヤキ、○アサ科：カナムグラ、○クワ科：ヒメコウゾ、クワクサ、イタビカズラ、ヤマグワ、○イラクサ科：クサコアカソ、オオバコアカソ、サガミヤブマオ、クサマオ、メヤブマオ、コアカソ、ムカゴイラクサ、ミズ、ヤマミズ、アオミズ、イラクサ、○ウマノスズクサ科：オオバウマノスズクサ、タンザワウマノスズクサ、ランヨウアオイ、カンアオイ、カントウカンアオイ、○

タデ科：ミズヒキ，オオイヌタデ，イヌタデ，タニソバ，ボントクタデ，アキノウナギツカミ，ミゾソバ，ハナタデ，ナガボハナタデ，イタドリ，スイバ，ギシギシ，○アカザ科：シロザ，アリタソウ，ケアリタソウ，○ヒユ科：ヒナタイノコヅチ，ヒカゲイノコヅチ，ホソアオゲイトウ，イヌビユ，○スベリヒユ科：スベリヒユ，○ナデシコ科：ウシハコベ，○フサザクラ科：フサザクラ，○キンポウゲ科：イヌショウマ，コボタンヅル，ハンショウヅル，クサボタン，センニンソウ，シロバナハンショウヅル，ウマノアシガタ，アキカラマツ，○アケビ科：アケビ，ミツバアケビ，○ツツラフジ科：アオツツラフジ，オオツツラフジ，○モクレン科：シキミ，サネカズラ，ホオノキ，○クスノキ科：ヤブニッケイ，ヤマコウバシ，ダンコウバイ，アブラチャン，クロモジ，タブノキ，シロダモ，○ケシ科：タケニグサ，○アブラナ科：ナズナ，タネツケバナ，○ユキノシタ科：ウツギ，マルバウツギ，タマアジサイ，ガクウツギ，ヤマアジサイ，ユキノシタ，○バラ科：ヒメキンミズヒキ，キンミズヒキ，クサボケ，ヤブヘビイチゴ，ダイコンソウ，ヤマブキ，カマツカ，イヌザクラ，ウワミズザクラ，マメザクラ，ヤマザクラ，アズマイバラ，ノイバラ，クマイチゴ，クサイチゴ，ニガイチゴ，モミジイチゴ，ナワシロイチゴ，ウラジロノキ，シモツケ，コゴメウツギ，○マメ科：ネムノキ，ヤブマメ，ケヤブハギ，ヤブハギ，フジカンゾウ，ヌスビトハギ，ノササゲ，ツルマメ，キハギ，マルバハギ，イヌエンジュ，クズ，トキリマメ，ハリエンジュ，フジ，○フウロソウ科：ゲンノショウコ，○カタバミ科：カタバミ，アカカタバミ，○ミカン科：マツカゼソウ，カラスザンショウ，イヌザンショウ，コクサギ，キハダ，オオバキハダ，ミヤマシキミ，サンショウ，○ニガキ科：ニガキ，○トウダイグサ科：エノ

キグサ，タカトウダイ，コニシキソウ，アカメガシワ，シラキ，○ドクウツギ科：ドクウツギ，○ウルシ科：ヌルデ，ヤマハゼ，○モチノキ科：イヌツゲ，○ニシキギ科：ツルウメモドキ，オニツルウメモドキ，オオツルウメモドキ，コマユミ，マサキ，ツリバナ，マユミ，○ミツバウツギ科：ミツバウツギ，○カエデ科：オオモミジ，チドリノキ，ミツデカエデ，ウリカエデ，カジカエデ，オニイタヤ，ウラゲエンコウカエデ，イタヤカエデ，エンコウカエデ，イロハモミジ，○アワブキ科：アワブキ，○ツリフネソウ科：ツリフネソウ，ナメラツリフネソウ，○クロウメモドキ科：クマヤナギ，○ブドウ科：ノブドウ，キレハノブドウ，ヤブカラシ，ツタ，サンカクヅル，エビヅル，○シナノキ科：カラスノゴマ，○マタタビ科：サルナシ，マタタビ，○ツバキ科：ヤブツバキ，チャノキ，ヒサカキ，○スミレ科：ナガバノスミレサイシン，エイザンスミレ，タチツボスミレ，アオイスミレ，ケマルバスミレ，ヒナスミレ，ヒカゲスミレ，○イイギリ科：イイギリ，○キブシ科：キブシ，○ジンチョウゲ科：オニシバリ，○グミ科：ツルグミ，○アカバナ科：アカバナ，メマツヨイグサ，○ウコギ科：ヤマウコギ，ミヤマウコギ，ウド，タラノキ，ヤツデ，キツタ，ハリギリ，○セリ科：ノダケ，イワニンジン，シラネセンキュウ，セントウソウ，ミツバ，ミヤマチドメ，チドメグサ，セリ，ヤブニンジン，ウマノミツバ，ヤブジラミ，○ミズキ科：アオキ，ヤマボウシ，ミズキ，クマノミズキ，ハナイカダ，○リョウブ科：リョウブ，○ツツジ科：ネジキ，アセビ，ミツバツツジ，ヤマツツジ，○ヤブコウジ科：ヤブコウジ，○サクラソウ科：オカトラノオ，コナスビ，○カキノキ科：シナノガキ，カキノキ，マメガキ，○モクセイ科：マルバアオダモ，アオダモ，イボタ，ミヤマイボタ，○キョウチクトウ

科：テイカカズラ，○ガガイモ科：オオカモメヅル，○ムラサキ科：ホタルカズラ，○クマツヅラ科：ムラサキシキブ，コバノムラサキシキブ，ヤブムラサキ，クサギ，○シソ科：タチキランソウ，ジュウニヒトエ，トウバナ，イヌトウバナ，ナギナタコウジュ，フトボナギナタコウジュ，シモバシラ，イヌコウジュ，レモンエゴマ，セキヤノアキチョウジ，ヤマハッカ，ヒキオコシ，アキノタムラソウ，キバナアキギリ，ニガクサ，ツルニガクサ，○ナス科：クコ，イガホオズキ，ヒヨドリジョウゴ，マルバノホロシ，ハダカホオズキ，○ゴマノハグサ科：トキワハゼ，○キツネノマゴ科：キツネノマゴ，○ハエドクソウ科：ハエドクソウ，ナガバハエドクソウ，○オオバコ科：オオバコ，○アカネ科：ヤマムグラ，ヤエムグラ，ハシカグサ，ヘクソカズラ，アカネ，○スイカズラ科：ツクバネウツギ，ウグイスカグラ，スイカズラ，ソクズ，ニワトコ，ガマズミ，コバノガマズミ，ヤブデマリ，ハコネウツギ，ニシキウツギ，○オミナエシ科：オトコエシ，ツルカノコソウ，○ウリ科：アマチャヅル，スズメウリ，カラスウリ，キカラスウリ，○キキョウ科：ホタルブクロ，ツルニンジン，○キク科：ノブキ，オクモミジハグマ，キッコウハグマ，ブタクサ，オオブタクサ，ヨモギ，ノコンギク，シロヨメナ，カミヤマシロヨメナ，サガミギク，シラヤマギク，ヒロハホウキギク，アメリカセンダングサ，コセンダングサ，モミジガサ，ヤブタバコ，コヤブタバコ，ガンクビソウ，サジガンクビソウ，ヒメガンクビソウ，トキンソウ，ホソエノアザミ，アズマヤマアザミ，タイアザミ，ノハラアザミ，オオアレチノギク，ベニバナポロギク，リュウノウギク，ダンドポロギク，ヒメジョオン，ヒメムカシヨモギ，ハルジオン，ヒヨドリバナ，ハキダメギク，チチコ

グサ，ユウガギク，カントウヨメナ，アキノノゲシ，ホソバアキノノゲシ，ヤマニガナ，ムラサキニガナ，ケムラサキニガナ，ヤブタバコ，センボンヤリ，カシワバハグマ，ヤクシソウ，コウヤボウキ，フキ，コウゾリナ，キントキヒゴタイ，コメナモミ，メナモミ，セイタカアワダチソウ，アキノキリンソウ，ノゲシ，ヤブレガサ，セイヨウタンポポ，カントウタンポポ。

当日の参加者：秋山 守，阿部真知子，Annette Schörner，稲垣ユキ子，小沢 敬，小川治作，勝山輝男，城川四郎，菊地真知子，工藤一成，黒沢一之，小久保恭子，齋木 操，佐々木あや子，鈴木順子，園田秋子，高坂雅子，高橋秀男，田中京子，田中徳久，長岡 恂，根本 平，平川恵美子，古川冷實，山口育子，山口勇一，山崎泰子，山下英希，山田文雄，吉沢 健，吉田多美枝，吉永陽一

---

## 事務局より

原稿の集まりがよく、久しぶりにページ数が増えました。そのせいではありませんが、総会で予定した発行期限に少し遅れてしまいました。先日、植物誌改訂にむけての調査メッシュのアンケートをお願いしましたが、来春から再調査をスタートします。その発足集会を兼ねて、1月27日（土）に総会を予定しています。そのときに、調査の具体的な方法、分担などを提案したいと思います。是非、ふるって御参加ください。

11月20日に相模原市立博物館がオープンしました。相模原から県北方面の植物調査のセンターとなることを期待したいと思います。

内田藤吉先生より湯河原で撮影されたアケボノシュスランの写真を送っていただきました。スペースの都合により、次号にまわします。次号は3月頃を予定しています。原稿をよろしく願います。